



五月蓬

ゴゴツウヨモギ

天使の  
降臨  
!5

ANGEL FALL!

Main Characters  
主な登場人物

マラーク

ヴォラス国を統べる王。  
20歳。初代天使  
アゲロスの末裔。

サイバグゼ  
オ羽救世

治癒術を操る綺麗な  
“男の娘”。22歳。  
反乱の罪を償うため  
慈善活動中。

アンジュウスハ  
杏樹薄葉

超平凡・特徴なしの高校生。  
18歳。摩訶不思議な  
「暗中無心拳」の使い手。

サイバイツキ  
オ羽済

ノス国最強の剣士。  
21歳。ボーイッシュな外見・  
性格をした救世の妹。

アンジュアキカ  
杏樹明華

薄葉の妹で才色兼備の  
優等生。17歳。  
異世界で覚えた超強力  
な魔法を操る。

ハラソ

中二的な言動、服装で  
相手を惑わす墮天使。  
武器は数々のマジック  
アクセサリ。

ミュゲ

天真爛漫な少女。  
10歳。自立起動型魔具  
とらちゃんとは相棒。

レンダ

レンダサークルの  
リーダー。19歳。  
人間離れた戦闘力を  
有する女勇者。



アンジュウスハ  
杏樹薄葉

世界中の腕利きが集う闘技祭——ヴォラスカーニバル。  
二回戦を終えベスト8が出揃った翌日は休養日とされ、来るべき準々決勝に向けて、参加者は思いの時間を過ごしていた。

そんななか、この大会で一躍脚光を浴びることとなったレンダサークルを率いるレンダは、人目を避けて薄葉の部屋にやって来た。

ドアを開けた薄葉は、無理矢理部屋に押し入ってきたレンダを止めようともしない。

「何だ？ またトランプでもしようってか？」

「あ、あれは、互いに試合に臨む態度を正すための儀式だつての！」  
とつてつけたような理由に、若干呆れたように苦笑する薄葉。

「……初めて会った時、俺達に喧嘩を売ってきたのは？」

「それは、天使がどんな奴か見たかっただけよ」

「またも今考えたような理由だったので、薄葉は皮肉を込めて続けた。

「ただの馬鹿かと思ってたよ」

「ふふん。否定はしないわ。私はただの馬鹿なのかもね」

レンダはくくっと自嘲するような笑みを浮かべて、薄葉のベッドに腰を下ろす。

普段の暴走気味な態度と違ったので、薄葉はきよんとした表情になった。

「馬鹿と言われて怒らない……熱でもあるのか？」

「違うっての！ あんた達を少しでも疑ってた、私が馬鹿だったって言ってんの！」

ようやくらしい怒り顔を見せたと安心したのも束の間、その言葉に薄葉はびくりと反応する。

「疑ってた？」

するとレンダは、誤魔化すようにベッドをバンと叩いた。

「……それは今、どうでもいいのよっ！ 私はちよつとした約束を取り付けにきたの！」

レンダから、薄葉でも感じ取れるほど胡散臭い雰囲気が漂った。しかし、レンダは悪巧みができ

るようなタイプではない——それよりもこの言葉が気に掛かった。

「約束？」

「そう！」

レンダは薄葉の額に人差し指を押し当てて告げた。

「今日の夜八時に、宿舍の裏口を出てまっすぐ進んだ先にある、でっかい木の下で待ってなご

っつ！！」

まさかの呼び出しである。

「え？ なんで？」

「いいからっ！ 黙ってくればいいの！」

あまりにも強引な誘いである。

「……うーん、困るなあ」

普段なら押し切られ頷いていたかもしれないが、薄葉は腕を組んで難しい表情を浮かべた。

「俺、今日の夜に妹と話をしようと思ってるんだ。だからちよつと無理だわ」

今度は、レンダがしばらくきよんとしてから、口をぐぬぬ……とへの字に曲げる。

「……ああ、もうっ。サブライズの意味がないじゃない」

「サブライズ？」

「分かった分かった！ もう言っちゃうわ！ 私があんたを呼び出そうとしたのは、アキカと会わせるためのの！」

もう隠しきれない、というより隠す必要もない、といった感じで告げるレンダ。

「……え？ それってどういう……」

びしっと指を突き立てて、レンダは必要以上に大きな声を上げる。

「事情を説明してあんたに逃げられたら、元も子もないでしょ！ だから、別の用事で誘って会わせようとしたのよ！ いつまでもウジウジウジウジ、あんたらは二人揃って面倒臭いっ！ 私と戦

う時までそれを引き摺<sup>ず</sup>ってたら、承知しないわよッ!!」

鼓膜<sup>こまく</sup>が裂けるかと思うほどの大声に、耳を塞いだ薄葉は慌てた。

「わ、分かったから大声出すなって! 人が来ちゃう!」

「誰もあんたになんて興味ないっての!」

「ひ、ひでえ!」

軽くショックを受ける薄葉。そういえば、前にも同じようなセリフを言われた気がする。

あれ? 俺<sup>おれ</sup>ってもしかして誰にも気にされてない? その事実に薄葉は目の前が暗くなったが、いきなりシャレにならない威力で背中を引っぱたかれて悶絶<sup>もんぜつ</sup>した。

「とにかくっ! 八時まで猶予<sup>ゆうよ</sup>をあげるわッ! 会う覚悟があるなら来なさい! 裏口を出てまっすぐ行った先の、でっかい木の下だからっ!」

「オ、オウケイ。心得た」

「ウジウジしないように私が立ち会ってあげるんだから! 感謝しなさい!」

鼻息荒く、再びバシーンッと薄葉の背中を叩いて、レンダは立ち上がる。

「……ありがとな」

ベッドに手をついた状態の薄葉は、痛みを耐えながらそう呟<sup>つぶや</sup>いた。

「べ、別にあんたのためにやってるんじゃないんだからねっ!」

「ツンデレかっ」



杏樹明華<sup>アキカ</sup>

午後七時。約束の時間まであと一時間。

「あー、もう、慌てすぎだっの!」

「で、でも……」

すたこらさっさと目的地に向かおうとする明華を、力強く引つ張り止めるレンダ。頬を赤くしながらうずうずうずしている明華に、ゲンコツを軽く一発お見舞いする。

「まだ一時間前! 早すぎるっの!」

「でもやっぱり先に待ってた方が……」

「にしたって早すぎ! 風邪<sup>かぜ</sup>引くわよ!」

明華は既に身支度を完璧に整えて、待ち合わせ場所に向かう気満々だった。それに付き添う予定のレンダは、呆れ果てて首を横に振った。

「……ちよっと、本気で落ち着きなさいって。心の準備は?」

「うう〜」

「出来てないんかいっ! あ〜もう、本当に、もうっ!」

仕方なく、レンダはそわそわしつばなしの明華の手を引き、女性部屋区域の通路を進む。

「え？ もう行くんですか!?」

「あなたが行くとうしてたんでしようがっ！ ああ、もう、面倒くさっ！ 会いたいのか会いたくないのか、どっちなの！」

レンダのストレートな問いに、明華は思わず目を逸らす。もう、白状するしか道は残されていないかった。

「……会いたいです」

いつもは溜め息をつかれる側のレンダが、「本当にどっちなの……」と溜め息を漏らしながら、明華の手を引いて裏口を目指した。

中央ホールに出て、廊下を進む。この辺りに人気がないというのは事前に調査済みだった。だからこそ二人を引き合わせる場所を選んだのだ。

裏口の小さな扉を押し、レンダと明華は外に出た。

そして、先を進んでいたレンダは足を止める。

「レンダさん？」

「……どうして、あんたがここにいるわけ？」

裏口を出てすぐ、奇妙な生き物を象った石像の台座に腰掛けている女がいた。

特徴的な白い無地の仮面。セルセラ・コミュニティの窓口係、ジアミエンである。

「ジアミエンさん？」

「おや、奇遇ねえ。明華ちゃん」

白々しさが鼻につく。

レンダはあからさまな嫌悪感を顔に出してジアミエンを睨む。

「アキカに何の用？ 急いでるんだけど。それに参加者以外がここにいていいと思ってるの？」

ひらひらと手を振っていたジアミエンは、レンダの鋭い視線に「くっくっ」と笑うと、首を横に振った。

「いや、構わないで結構よん。私は別の用事で来てるから。ちゃんと許可も取ってるしね」  
ぴらりと一枚の紙を取り出す。そこには『参加者宿舎入場許可証』の文字があった。

「別の用事ってどういう——」

「ジアミエン！」

その声は、レンダと明華の背後から響いた。

見れば、裏口から一人の少女が走ってくる。

痩せこけた頬に、細い身体——昨日、明華達と戦ったチーム、セルセラアンゲルスに属していた少女、ゼンゼンマンだ。

ゼンゼンマンは腰掛けたままのジアミエンに駆け寄り、ぎゅっと抱きつく。

「ごめんなさい、ごめんなさい、負けちゃって、ごめんなさい、捨てないで、捨てないで」

「捨てないで、って……大丈夫、大丈夫。大丈夫だから、ね？ ほら、よくしよし」

その頭を優しく撫でて、ジアミエンは彼女を抱き寄せた。

事情が分からず、明華達はぼかんとしてしまふ。

ジアミエンはそんな二人の視線に気付いたようで、「あつはは……」と気まずそうに笑い声を漏らした。彼女らしからぬ反応である。

「いやあ……妙なところ見られちゃったね。気にしないでね、明華ちゃん。本当に」

「あの……その子は？」

ジアミエンが珍しく、困った様子を見せた。いつも飄々としてどこかふざけている女が、今はまるで母親のような空気を漂わせている。

「……隠すことでもないから、まあ教えるけど。本当に気にしないでいいんだからね？」

「いいから、とっとと話さないよっ！」

「おお、怖い怖い。女勇者様は気が短いですねえ」

はぐらかそうとするジアミエンだったが、レンダに睨まれ、「あはは」と笑いながら説明を始める。

「この子、いろいろ複雑な事情があつてね、コミュニティで預かつてるのよ。虐げられて、親も失つて、精神的にもボロボロだったこの子を引き取って、私が面倒見てただけだし……いろいろ教えて上げると、吸収の早いこと早いこと！ つい、私の方も楽しくなっちゃって、気付けばコミュニティでも指折りの人材に！ そうこうしているうちに、立派な働き手になっちゃってねえ」

嬉しそうに語るジアミエンに、レンダが鋭く突っ込む。

「虐げられてたつて……何よ？」

「……『テラス狩り』。明華ちゃんはともかく、女勇者様なら知ってるんじゃない？」

特に誤魔化すこともなく、ジアミエンは白状した。

「……あれの生き残りなの？」

表情に影の差したレンダが、一瞬唇を強く結んだのを明華は見逃さなかった。

「テラス狩りつて……何ですか？」

嫌な感覚を覚えながらジアミエンに尋ねる。

「簡単に言うと、ずっと昔に起こった、『最強のテラスと人間の最終戦争』の後始末、つて奴よ」

「最強のテラス……」

聞き捨てならない単語を明華がなぞるように呟く。

ジアミエンは頷いた。

「そう、レマルゴスと名乗る三体のテラスのグループ。最高の頭脳と魔導を有するリーダー『張り付けのルーナ』。圧倒的なアルマ量と破壊力を有する『球界のエストレリヤ』。変幻自在で無数の姿を有する『異物のイリヨス』。あいつらはたった三体で人類に喧嘩を売った。この星テッラを統べるためにね」

その中には、明華に聞き覚えのある名前があった。アナトリの地で薄葉によって瞬殺されたエス

トレリヤ。あれが最強のテラスの一角だったとは……と暫し啞然とする。

「ジアミエンは気にする様子もなく続けた。

「決戦の地はここ、ヴォラス。代表を立てての代理戦争の結果、テッラの、人類の勝利に終わったわ。ルーナを討ち取りテラスの侵攻は防がれたの。そう、討ち取られたのはルーナだけだった」

「ジアミエンは、震えるゼンゼンマンの頭を再び優しく撫でた。

「テッラの代表は当時の天使達。ルーナを倒し、他の二体のテラスも追い詰めたんだけど……突然、一人の天使がテラスを庇ったのよね。『勝敗は決した。これ以上の殺戮は必要ない』……って」

「当時の天使——それを聞き、明華は真っ先にヨシエのことを思い出した。

「『テラスとの共存』を謳い、その天使はテラスの味方をした。結果、二体のテラスはまんまと逃げ延びた。でもその天使は、敵を逃がした反逆者として処刑されたの」

「……え？」

「その後、天使達は逃げたテラスを追い、各地を回ったわ。エストレリヤは大陸外にまで逃亡したと確認できた。でも一番厄介な、人に化ける能力を持ったイリヨスは見つけられなかった。国境を越えたという報告もなく、発見は想像以上に困難だったの。人間に化けられたらお終いだしね。だからヴォラスは、怪しい者を手当り次第に殺した。当時からテラスと馴染み、関わっていた国中の村で『テラス狩り』を行ったの」

話が進むに連れて身体の震えが大きくなるゼンゼンマン。

「ジアミエンは「ごめんね」とささやき、その肩を叩いた。

「……分かるでしょ？ 要は『疑わしきは黒』よ。それほどイリヨスというテラスは厄介だった。

秘密裏に行われたテラス狩りは、とにかく殺して、殺して、殺して……そりやもう、言葉にはできないくらい凄惨なものだったのよね。そして、それは今でも続いている」

「魔女狩りのようなものかと想像していた明華の顔が凍り付く。

「え……？」

「この子の村も、テラス疑惑を掛けられて……そして、家族を全員失ったのよね。まあ依頼で出向いてた私が何とか子供は保護したけど……大変だったのよ、心のケアも。そっちの女勇者さんも知ってるんじゃない？」

「ジアミエンがレンダに顔を向けた。

「……そうね。私もその子と同じだから」

「明華は驚いてレンダを見た。暗く、悲しげな表情だった。明るく輝くいつもの表情はそこになく、辛そうにジアミエンにしがみつくゼンゼンマンを見つめていた。

その時、急にジアミエンの口調が一変する。

「……ってね。柄にもなく湿っぽい話しちゃったね！ ほら、ゼンちゃん泣かない！ いやあ、私この子のヴォラス嫌いを治すのにさあ、ヴォラスカーニバルで見返してやれっ！ なあって無責任なこと言っちゃった訳よ。だから、負けちゃったこの子を慰めに来たってこと！ ごめんね？ 結

局引き止めちゃって！」

口先で「けらけら」笑ってジアミエンは誤魔化す。その仮面は都合良く表情を覆い隠していた。ほんの少し、この得<sup>え</sup>体の知れない女の一面が分かったような気がして、明華は微笑んだ。

「私も、できることがあつたら……何でも協力しますから」

「やだ、やめてよ！ そんな重<sup>おも</sup>苦しいこと言わないでって！ 大丈夫よん！」

最後まで徹底して誤魔化す——それがジアミエンなのだろうと、明華は納得して頷いた。そして、ジアミエンにしがみついて泣くゼンゼンマンを見て、邪魔しないほうがいいかな、とレンダの腕を引<sup>ひ</sup>つ張<sup>は</sup>った。

「じゃあ、私達はこれで」

そこでジアミエンが明華を呼び止める。

「待って」

「……え？」

再び声色が変わった。

「これは善意よ。決して思惑があつての忠告じゃない。それだけは理解して」

「な、何ですか？ 急に」

「今は薄葉<sup>うすは</sup>つちとの待ち合わせ場所に行くのを止めなさい」

唐突な忠告に対し、レンダが眉をびくりと動かし、低い声を出す。

「ジアミエン……どういうつもり？」

「……理由を知りたいの？ 今ここで『見せる』こともできるけど」

真面目なトーンに、明華は少し怯<sup>おそ</sup>んだ。

明華は薄葉<sup>うすは</sup>に会いに行くのをやめるつもりはない。だが、ジアミエンの言葉は、何故かとてもなく不気味なものに聞こえた。

「何が……あるんですか？」

「見たいの？ 正直言うと、見るべきものじゃないと思う。ただ、面と向かって目撃するよりは、薄葉<sup>うすは</sup>つちのいないここで見た方がいいかもしれない。私にはそれを判断する能力がない。だから選んで、『何も見ず引き返すか』『ここで見るか』……あ、何も見ず薄葉<sup>うすは</sup>つちのところに行くと言<sup>い</sup>うなら——」

ジアミエンの手から、赤いスコップがぐんつと伸びる。

「明華ちゃんのために、私が全力で邪魔をする」

確かな覚悟がジアミエンの言葉の裏にはあつた。

「何よ！ やろうっての!？」

「レンダさん。待って」

明華は目を逸らしてはいけないものだと判断し、ジアミエンの善意を信じることにした。

「見せてください」

「ちよ……アキカ！」

レンダが止める暇もなかった。こくりと頷ぎジアミアンが動き出す。

「……分かったわ。んじゃ、お目々を拝借！」

ジアミアンの唱える聞き慣れない不可思議な呪文が、静かな夜に響き渡る。そして最後に明華に人差し指を向けて告げた。

『「シヨジニ・メアリ」』

明華の目に大きな木が映る。視界に映像が直接張り付けられた、そんな感覚だ。

その木の下には薄葉がいた。

「……お兄ちゃん？」

薄葉だけではなかった。彼の傍らには一人の女がいる。巫女服に身を包む女だ。黒い髪を垂らし薄葉の隣に座っている。

何かを話しているようだが、会話までは聞き取れない。

——何を、してるんだろう？

一時間前の待ち合わせ場所に、薄葉はとっくに来ていたようだ。それまでの時間潰しということだろうか、女と薄葉は何かを話している。

これのどこが問題なのだろう。もしかして、ヤキモチを焼くと思われているのだろうか。そこまです嫉妬深くないけどな、と明華は少し唇を尖らせる。

しかしその直後、女がずっと薄葉に近付き、女の腕が薄葉の身体に巻き付いた。

そして、うっすらと女の口元が見えたかと思うと、薄葉と女の唇が重なりあっていた。

「……あ」

キスだ。キスだった。薄葉と女のキス。

それと同時に、明華の視界は元に戻る。

「ごめんね」

ぼそりと呟くジアミアン。

同じ映像を見せられたレンダが、明華の顔をゆっくりと覗き込んだ。啞然としている表情を見て、こくりと息を呑む。

「アキカ……」

レンダは杏樹兄妹の関係をそこまで詳しく知らない。しかし、今見た映像は、明華にとってよろしくないものなのではないか、と直感していた。

どんな言葉を掛けていいのか分からず、レンダは言葉を詰まらせる。

「アキ——」

それでも何とか言葉を掛けようとしたその時、明華の表情が変わる。

明華は笑っていた。どこか吹っ切れたような明るい笑顔だ。

「アキカ……大丈夫？」

「……なんだか、ようやくすっきりしました」

レンダには、明華の言葉に嘘はないと思えた。

何がすっきりしたのか？ それを聞くことはできない。ただ、何かを納得したような明華の表情を見て、ぼかんとする他なかった。

「レンダさん。一度、部屋に戻りましょう」

「え？ 行かないの？」

「行きますよ、後で。待ち合わせ時間になつてから行きましょう。邪魔をしちゃ悪いですから」

明華は踵を返して宿舎に戻っていく。レンダはそれを引き止められず、代わりにジアミエンを鋭く睨んだ。

「どういうつもり？」

「善意。私はそう言ったはずよ。選択の余地もあげた。これは明華ちゃんが望んだこと。それに、現実から目を背けて何かが変わる？」

悔しさを覚えつつもレンダは言い返せない。それが正論に聞こえたからだ。

「そう、目を背けてちゃ、駄目なんですよね」

明華が歩みを止めて呟いた。

「大丈夫。ありがとう、ジアミエンさん。もし目の前で、生で見ちゃってたら、私卒倒しちゃつてたかもしれません！ あはは」

「……ごめんね」

沈んだ声でジアミエンが謝罪する。

「仕方ないですよ！ それに、ようやく分かりました、私！ モヤモヤの正体も、私がこれからどうすべきなのかも！」

明るく華のように笑って、明華は両腕をぐっと空に伸ばした。

「だって、私は、お兄ちゃんが大好きだから！」

明華の明るい声が夜空の下に響きわたった。



### 杏樹薄葉

時刻は午後七時前に遡る。

薄葉は八時の待ち合わせを前にして、そわそわしていた。

「早すぎたか……？」

早すぎである。小心者の薄葉は、一時間以上前から待ち合わせ場所で待っていた。

話し相手がおらず、暇で寂しいから既にここにいる訳ではない……いや、ほんの少しだけその節はあったが。

夜の寒さに身体を震わせていた薄葉は、突然声を掛けられ、さらに大きく震え上がる。

「どれだけ早く来てるんですか。まあ、待ち合わせ場所に早く来るのはデートにおける男のマナーと言えるでしょうし、いい心がけだとは思いますが」

「お、お前……姫神？」

「はい。これから妹さんと会うんですよ。大丈夫なんですか？」

姫神美命。姫巫女と呼ばれるヴォラスの天使は、垂衣を外して素顔を晒し、薄葉の前に姿を現した。そのまま薄葉の隣に腰を下ろすと、目の下にある隈を撫でる。

「どうして知って……俺の未来を見たのか？ まあ、立ち会ってくれる奴がいるから。大丈夫、だと思っ」

「そこは格好よく、大丈夫と言いつて欲しいですね。ヘタレですか」

すっぱりとした物言いに、しゅんとして薄葉が頭を垂れた。

「面目ない……」

「そこは、ヘタレじゃねーし！ とでも威勢よく言ってください。まったく勘違いも甚だしいです」

「勘違い？」

呆れ顔の美命を、薄葉は見上げる。

「私には、『未来と過去』を見る力しかありませんので。人の気持ちまでは分かりませんよ。ああ、間違えました。私には、未来を見る力しかありません。仮に過去を知る力が本当に私にあれば、あ

なたの妹さんの気持ちも、あなた自身の気持ちも見えたのでしょうか」

答えになっていない答えを返した美命は、笑っていた。

「そう、『過去を見る力』は私のものではないのです。だから私はそれを取り戻したい……取り戻したい。取り戻したいのです」

「……何を言ってるんだ？」

背筋を走る寒さ——夜風のせいではない、精神的な悪寒に身を震わせ、恐る恐る薄葉が問う。

「つまりは……こういうことです」

美命の身体からふらりと力が抜け、重力に身を任せるように倒れ込む。

弱々しい身体を支えるため反射的に薄葉が構えると、その動きを見越したように、美命はすっと薄葉に寄り添った。

抵抗する間も与えず、美命は薄葉の身体に密着して、その顔にぐいっと自分の顔を近付ける。

「お、お前、何して——」

「マウストウマウスは初めてですか？」

その時薄葉は、美命の爛々と輝く黒い瞳に吞み込まれるような気がした。

ぢゅううううううううっ！

「んんんんんんんっ!？」

突然の事態に、薄葉の籠もった悲鳴が響きわたる。

数秒の交わりを終えて、美命は薄葉を抱く腕を解き、顔を後ろに引いた。

「……ふう。私もキッスというモノは初めてです。上手くできましたか？」

「な、何をするきさまーっ!!」

薄葉は顔を真っ赤にして叫んだ。唇も真っ赤である。

「何って……キッスですよ、キッス。ちゅーです。ちゅー。あれ？ 照れてます？」

「吸うなッ!! じゃなくて、いきなり何してくれてんだ!! どういうつもりなんだよ、お前は!？」

しかし、そんな薄葉の戸惑いや驚きも一瞬で消え去ってしまう。

美命の口角がぐにやりと持ち上がったのだ。

細めた目から伝わってくる不気味な空気は、恋する相手にキスをした女の見せるものではない。

まるで何かの企みが成就したような、悪党の下卑た笑みだ。

「どういうつもり……？ うつくく! 面白いことを聞きやがりますね？ ハナから私の目的は、

たあつたのひとつに決まってるじゃねーですか？」

「姫神……？」

いきなり砕けた口調に薄葉は目を丸くする。

「そおんな、捨てられた子犬みたいな目で見てくれてんじゃねーですよお？ うつけけっ! 大丈夫ですって! 別に、君に変な感情なんざ抱いてねーですし? 戯れだと思ってくださいな!」

美命は豹変した。否、正体を現した。

「……あれ? 開いた口が塞がらない、って感じですか? うおっほん。それはまた失礼しました。なら丁寧にお話をさせていただきますと、今のはちよつとした運命操作ですよ。私にとつて望ましくない運命を修正して、ルートを確定させただけです。そのために君の純潔を奪っちゃったことは謝ります。ごめんね?」

「……さて、私も用事が済んだことですし、これでお暇しましょう」

「あ、あれをするためだけに来たのか?」

「ええ。そうですね。まあ、これから大勝負に出向くあなたへのエールだと思ってください」

「緊張しないで、存分に妹さんのお話を楽しんでくださいな……最後に姫巫女の予言をひとつ。」

「妹さんは待ち合わせ時間ちょうどに来ます。それでは良い夜を」

「お、おいー!」

薄葉の呼び止めにはもう答えず、美命は夜の闇へと姿を消した。

姫神美命は、緩む口元を押さえながら、確定した未来に胸を躍らせる。  
 やった、やった、やってやったッ！

杏樹薄葉——地味でどうしようもなくぱつとしないあの男こそが、運命の分岐点なのだ。薄葉との接触により、不確定に揺れていた天秤が完全に望む方向に傾いた。

黒、黒、真つ黒。果てしなく黒。限りなく黒。星も炎もない夜よりも、ずっと、ずっと深く真つ黒。自然と笑みが零れる。

「大いなる災厄がようやく訪れる！ これにて百パーセント確定ッ！！ 運命通り、未来通り、思い通りッ！！」

美命は名家ミスティコの復興のため、ヴォラスに舞い降りた『伝承の天使』である。

それ以外の義務はない。だからこそ彼女は、復興後のミスティコ家がどうなるうと関係ない。むしろ、滅びてしまえ、とさえ考える。それほどミスティコが憎くて憎くて、仕方なかった。

「大いなる災厄ッ！ 大いなる巨悪ッ！ やつと、やつと来てくれるッ！！」

美命のたつたひとつの目的。それはミスティコに奪われた、もつとも大切なものを取り返すことだ。そのためだけにミスティコという隠れ蓑の中で、じつとチャンスを待つしかなかった。

「……さあ、もうすぐ会えますね。お兄様」

美命は懐からひとつの鈴を取り出して、ちりと小さな音を鳴らした。そして鈴にいつもの口付けをしようとして、思い止まる。

唇に残る感触と利用した男を思い出し、少し引け目を感じたのだ。しかし首を左右に振って、意識を切り替える。もう手段は選ばないと決めた。

「そう、すべては運命通り」

確定した未来を見据えて美命は笑った。



### 杏樹薄葉

「あ……お兄ちゃん。待ちましたか？」

「ま、待つてないぞ、まったたく！」

八時ちょうど。明華は時間びつたり薄葉の前に現れた。レンダを伴わずに。

昨日までの明華との違いに、薄葉はすぐに気付いた。おろおろした素振りもなく、薄葉を熱心に見つめていたかつての姿もない。

今はどこか満たされた顔で、薄葉の隣に座って空を見上げていた。

薄葉は緊張しながらも口を開く。

立ち読みサンプル  
はここまで

「……な、なんかちゃんと話すの久しぶりだな」

「はい。そうですね」

明華はにっこり笑って薄葉に顔を向けた。

嫌われたのではないのか、と安心した薄葉は、なんとか話を繋ごうとする。

「あのさ……大丈夫か？」

「大丈夫？ 何がですか？」

「いや、ほら、あのオラクルとかいう奴らに捕まったこととか……」

「あはは。お兄ちゃんはいつまで心配してるんですか？ もう大丈夫ですよ、全然」

明華は楽しそうに笑う。

「心配かけちゃって、ごめんなさい」

「いや、そうじゃなくてな！ いやまあ、ほら、心配というか……あれだ！ そう……あれだ！」

『あれ』しか言葉が出てこない。

明らかに取り乱している薄葉に、明華はくすりと笑った。

「ふふ、お兄ちゃん、口下手」

「……ごめんなさい」

いかん、すっかりせねば。薄葉はうっしやと<sup>きあい</sup>気合を入れた。

「と、ところで、最近の俺の活躍をどう思う？」

